

水稲（中生品種）及び黒大豆の高温・少雨に対する技術対策について

備中県民局農林水産事業部
備北広域農業普及指導センター

本年は梅雨明け（7月21日）以降、異常な高温と少雨傾向が続いています。水稲の生育は、中生品種「きぬむすめ」は出穂が始まっています。黒大豆の生育は、概ね順調となっています。

8月17日に広島気象台から発表された「中国地方1か月予報」では高温傾向が続くと予報されています。

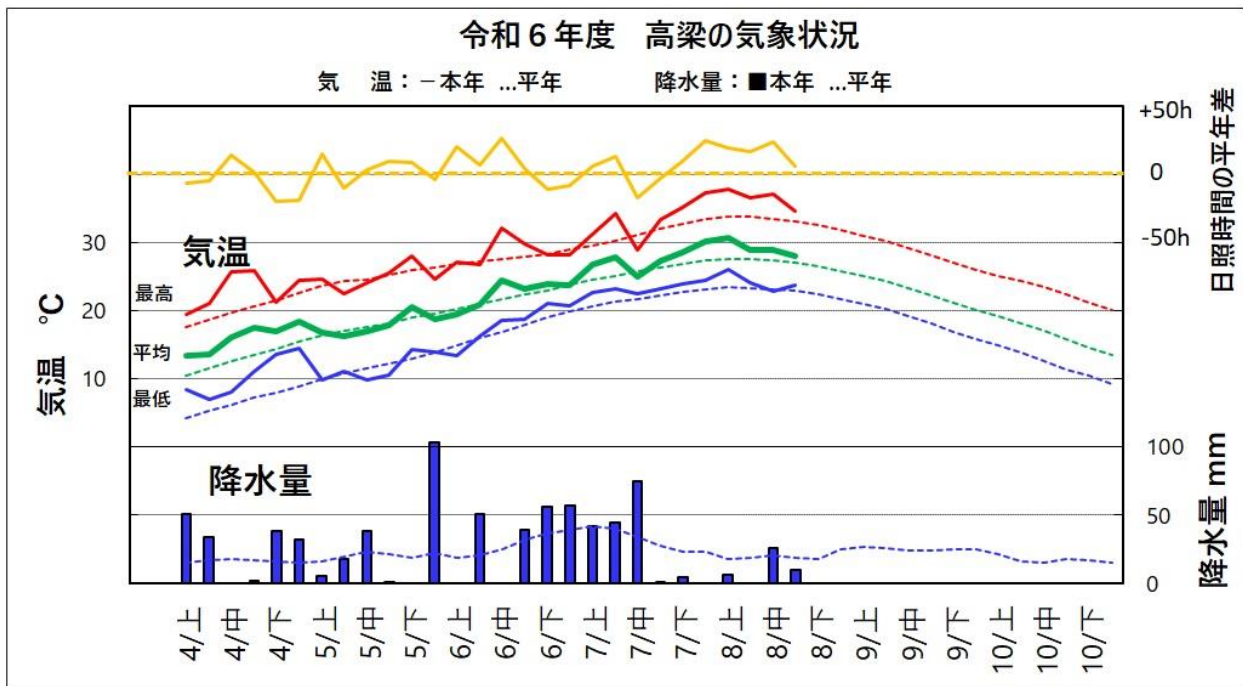
水稲では、出穂後に高温が続くと白未熟粒や未熟粒の増加が懸念されます。高温障害を回避する対策を徹底するとともに、今後の気象情報に十分注意してください。

1 これまでの気象経過と予報

(1) これまでの気象経過

- 7月下旬以降、気温は平年より高く推移しており、全量基肥一発肥料の窒素成分の溶出は、平年より早まっている可能性が高い。

〈高梁市の気象データ〉



〈令和6年の平均気温と降水量（7月下旬～8月中旬）〉

区 分	高 梁	
	平均気温(平年差) (°C)	降水量(平年比) (mm)
7月下旬	29.4 (+2.2)	4.5 (10%)
8月上旬	29.8 (+2.2)	6.0 (16%)
中旬	28.4 (+1.3)	36.0 (92%)

- (2) 1か月予報（令和6年8月15日 広島地方気象台発表）
（8月17日から9月16日までの天候見通し）
・期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。

2 これまでの生育状況

- (1) 水稲
・早生品種は、7月下旬～8月上旬に出穂し、穂数は概ね平年並みの見込み。
・中生品種は、出穂期～幼穂形成期で、茎数は、概ね平年並である。
- (2) 黒大豆
・7月は高温で推移したため、生育は順調で開花は平年並～やや早く始まった。

3 病害虫発生状況

- (1) 令和6年度病害虫発生予報第5号（令和6年7月30日 岡山県病害虫防除所発表）

作物名	病 害 虫 名	発生時期	発 生 量
水稲	葉いもち（中生、晩生種）	—	やや少
	穂いもち（極早生、早生種）	—	やや少
	紋枯病	—	並
	白葉枯病	並	並
	穂枯れ（早生種、中生種）	—	やや多
	ニカメイガ	並	並
	セジロウンカ	—	やや多
	トビイロウンカ	並	やや少
	イチモンジセセリ	並	やや少
	コブノメイガ	—	やや少
カメムシ類	—	並	
大豆	べと病	—	並
	紫斑病	—	並
	ハスモンヨトウ	—	並

- (2) 植物防疫情報等
・「斑点米カメムシの防除を徹底してください」植物防疫情報第5号(令和6年7月18日)

4 今後の技術対策

水 稲

- (1) 施肥による稲体の活力維持
・登熟期の葉色が薄い場合には、白未熟粒や未熟粒が発生しやすくなるため、出穂後に顕著な高温が予想される場合は、窒素成分で1～2kg/10aの追肥を行う。
- (2) 病害虫防除の徹底
・斑点米カメムシについては、引き続き発生状況に応じた的確な防除を実施する。
・本年は県内で、トビイロウンカの飛来、発生は確認されていない（8月20日現在）が、近隣の複数県で飛来や発生が確認されている。長期残効性箱剤を使用していない場合は、今後の発生状況に十分な注意が必要である。
・高温年には、コブノメイガや紋枯病などの病害虫の発生が多いので、予察情報を参考に、ほ場観察に基づいて的確な防除を行う。
・コブノメイガにより葉に食害を受けると登熟不良を招き、玄米品質が大きく低下する場合がある。ほ場での発生を確認した場合は早期に防除を行う。
- (3) 高温時のかけ流し及び夜間かん水等による地温低下
・出穂後の水管理は通常は間断かんがいであるが、高温が続く場合には、用水が豊富な地域ではかけ流しや夜間かん水等を行い、地温を低下させて根の活力維持を図る。

(4) 早期落水防止による玄米品質の維持

- ・早期落水は、未熟粒や屑米、胴割れ米、茶米の増加につながるため、出穂後 30 日頃を目安にできるだけ落水を遅らせる。

(5) 適期収穫の実施

- ・刈り遅れは、胴割れ米や茶米等が増加して玄米品質低下の原因となる。
- ・登熟期間が高温で経過すると、予想以上に成熟期が前進することがあるため、出穂後の積算気温等を参考にするとともに、登熟の進み具合（青味籾率）を随時確認して、早めに収穫作業の準備を行い適期収穫に努める。

【品種別収穫適期の目安（水稻・麦類・大豆栽培指針）】

品 種	きぬむすめ
出穂後の日数(日)	38～45
積算気温 (°C)	950～1,100
青味籾率 (%)	15～10

黒大豆

(1) 畦間かん水の実施

- ・黒大豆は、開花期に水分が不足すると落莢して収量が減少する。
- ・1 週間以上降雨がなく、土が白く乾いている場合、用水が確保できるほ場では畦間かん水を行う。
- ・土壌が乾燥していてほ場全体に水が到達しにくい場合は、畦間を仕切るなどして順次かん水を行う。
- ・黒マルチ栽培でも、降雨がない場合は土壌が乾燥する（8 月は無降雨日が 4 日以上連続する場合）ので、畦間かん水を実施する必要がある。

(2) 病虫害防除の徹底

- ・ハスモンヨトウによる白化葉がほ場内で散見されれば、防除を徹底する。

5 登熟期の高温による玄米品質への影響（参考）

きぬむすめ

- ・出穂後 20 日間の日平均気温が 25.5°C を越えると、白未熟粒が増加し始め、整粒歩合も低下する（図 1）

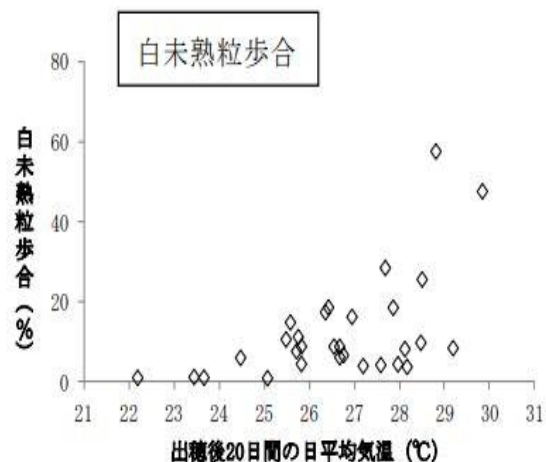


図 1 「きぬむすめ」における出穂後 20 日間の日平均気温と白未熟粒歩合との関係
岡山県農業研究所主要成果より抜粋